

## 看護大学生の所属大学を超えた交流の効果の検討

増満 誠\*, 松村智大\*\*, 中本 亮\*, 馬場保子\*\*\*, 谷多江子\*\*\*\*,  
小浜さつき\*\*\*\*, 石本祥子\*\*\*\*, 姫野深雪\*\*\*\*, 佐藤亜紀\*\*\*\*\*

### Strengths Obtained by Nursing College Students Through the Planning and Staging of Intercollegiate Exchange

Makoto MASUMITSU, Tomohiro MATSUMURA, Ryou NAKAMOTO, Yasuko BABA,  
Taeko TANI, Satsuki OBAMA, Sachiko ISHIMOTO, Miyuki HIMENO, Aki SATO

#### Abstract

**Aim:** This study aims to clarify how, from the planning stages until the day of the event, students cultivated a culture of learning while carrying out independent operations beyond the boundaries of their academic affiliations of their home universities and also shed light on the kinds of strengths they realized, acquired, and perceived as challenges.

**Subjects:** The study involved members of the planning and organizing committee of the Student Consortium and participants.

**Method:** The study was conducted between November 2014 and March 2015. Data was gathered through a questionnaire survey administered to the student committee members and through focus group interviews. The written responses and interview results obtained were qualitatively and inductively analyzed. In addition, this was conducted with the approval of the Fukuoka Prefectural University Research Ethics Committee.

**Results:** Responses were obtained from 33 participants, with interviews conducted with 6 participants. Analysis of the written responses and interviews results yield thirteen categories. These were *Attentiveness, Resolve, Foresight, Accountability, Operational Efficiency, Willingness, Collaboration, Leadership, Information Sharing, Ability to Think, Relatability, Overcoming Barriers, and Follow-through.*

**Discussion:** All these may be considered to be necessary strengths for nursing students. These results could be interpreted to suggest that students gained all these abilities as a whole by participating as student committee members within the Student Consortium.

**Key words:** Nursing College Students, Intercollegiate exchange, Strengths obtained

#### 要 旨

**目的:** 所属大学を超え学生が学生交流会の企画運営を通して、いかにして学びの文化が醸成され、またどのような力を自覚・獲得・課題としているのかを明らかにすることを目的とした。

**対象:** 学生交流会の企画実行委員及び参加者を対象とした。

**方法:** 研究期間は2014年11月から2015年3月であった。データの収集方法は、参加者及び学生委員へのアンケート調査及びフォーカスグループインタビュー調査を実施した。得られた記述内容やインタビュー結果を質的帰納的に分析した。

**結果:** アンケートは参加者59名、学生委員33名の回答を得、インタビューは6名の参加者を得た。記述内容及びインタビュー内容を分析の結果、13のカテゴリーを得ることができた。それらは【気配り】【協働】【情報の共有】【関係性】【積極性】【計画性】【責任性】【意志】【リーダーシップ】【思考力】【作業効率】【もどかしさの克服】【次期への挑戦】であった。

**考察:** いずれも大学生として看護職者として必要な力であるといえる。学生コンソーシアムに学生委員として参加することで総合的にあらゆる力を得ることができると示唆されたといえる。

**キーワード:** 看護系大学生, 所属大学を超えた交流, 得られる力

\* 福岡県立大学看護学部  
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

\*\* 福岡県立大学大学院看護学研究科  
Graduate School of Nursing, Fukuoka Prefectural University

\*\*\* 活水女子大学  
Kwassui Women's University

\*\*\*\* 聖マリア学院大学  
St. Mary's College.

\*\*\*\*\* 国際医療福祉大学

International University of Health and Welfare.

\*\*\*\*\* 産業医科大学

University of Occupational and Environmental Health,  
Japan.

連絡先: 〒825-8585 田川市伊田4395番地  
福岡県立大学看護学部基盤看護学系  
増満 誠

E-mail: masumitsu@fukuoka-pu.ac.jp

## 緒言

大学がその設置主体を超えて連携し組織された大学の共同体である大学コンソーシアムは大学コンソーシアム京都（大学コンソーシアム京都，2015）など都道府県内レベルのものから市町村内レベルのもの、あるいは都道府県を超えたものまで多種多様な組織体がある。一方で、学生が所属大学を超え組織体として交流しているものは、先述の大学コンソーシアム内に位置付けられている学生の組織体、大学コンソーシアム八王子（大学コンソーシアム八王子，2015）など数は多くない。また、看護系大学の学生を中心とし、それらの学生組織の活動目的において学びの文化の醸成を目指し広域での交流組織体はケアリング・アイランド九州沖縄大学コンソーシアム学生コンソーシアム以外無いのが現状である。また、学生交流についての研究は留学生との交流についてのものや多職種連携についての授業における研究は散見されるものの、学生の学外での主体的な組織を対象にした研究は見受けることができない。

さて、九州には平成21年度のケアリング・アイランド九州沖縄構想に端を発し、平成24年度からケアリング・アイランド九州沖縄大学コンソーシアム（ケアリング・アイランド九州沖縄大学コンソーシアム，2015）が発足した。また大学コンソーシアム発足と同時に学生コンソーシアムが発足し4年が経過した。全国的にも珍しい看護系大学における所属大学や学年を超えた学生コンソーシアムにおける学びの文化の醸成、学生交流の効果については事業報告書（福岡県立大学戦略連携室，2012）としての評価はあるものの、平成24年度以降評価や検討がなされていない。

## 目的

学生コンソーシアムにおける学生が企画運営を行う学生交流会において、その準備段階から当日まで、いかにして学びの文化が醸成し、またどのような力を自覚・獲得・課題としているのかを明らかにすることを目的とした。

## 用語の定義

学生コンソーシアム：学生による組織共同体。本学生コンソーシアムはケアリング・アイランド九州沖縄大学コンソーシアム（2015年度は11大学が加

盟、後述参照）の下部組織であり、九州地区8大学（福岡県立大学、産業医科大学、日本赤十字九州国際看護大学、福岡女学院看護大学、国際医療福祉大学、福岡大学、聖マリア学院大学、活水女子大学）、沖縄地区3大学（琉球大学、沖縄県立看護大学、名桜大学）により構成されている。基本的には学生の自主的な活動組織であり、それぞれの地区でトピックス研修やキャリアを考える機会、レクリエーションを交えた交流会を開催している。

ケアリング・マインド：ケアリングの前提となる心のありようのこと。

学びの文化：学びとは何かを考える機会となりその場や空間を経験すること。看護系大学の新設に相まって先輩がいない、または少ない、看護単科大学であることや地域偏在により各大学において、それぞれの大学の特色をもつ学生が、他大学の学生との交流を通して看護における基本的態度や能力を身につける機会や学習の環境を創造していくこと。

## 方法

### 1. 対象

平成26年度に開催されたケアリング・アイランド九州沖縄大学コンソーシアム学生コンソーシアムの九州地区学生交流会「かんたま祭」（以下、学生交流会）企画実行委員（以下、学生委員）及び交流会参加者

### 2. 期間

研究期間は平成26年11月から平成27年3月、なお調査は平成27年3月22日（日）に実施した。

### 3. データ収集方法

参加者へは表1の10項目について5件法（「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」）によるアンケート調査を実施した。学生委員に対しては、企画実行委員への参加動機、企画運営を通して得られた力や自己の課題と学生コンソーシアムの課題について自由記述を求めた。

また、学生委員に対しては、アンケート内容と同様に学生交流会の企画運営を通して得られた力や自己の課題、学生コンソーシアムの課題についてフォーカスグループインタビュー調査を実施した。

#### 4. データ分析方法

参加者アンケートに関しては5件法で得られた回答をそれぞれ点数化し平均値ならびに標準偏差を求めt検定を実施した。学生委員アンケート調査で得られた自由記述内容は、フォーカスグループインタビューにて得られた音声データを逐語録に起こした内容と混合し、質的帰納的に分析を行った。分析はそれらの記述データに対し記述単位毎に端的に表現するコード名を付した。次にコード名の類似性に基づきサブカテゴリ、カテゴリ、コアカテゴリと抽象度を上げ分析を行った。なお、分析過程では複数の共同研究者で討議し信頼性・妥当性の確保に努めた。

#### 5. 倫理的配慮

学生委員に対しては口頭と書面を用いて研究の説明を行い、同意を得たうえでアンケート調査を実施した。またインタビュー調査も同様に口頭と書面で説明し、同意を得たうえで学生委員の中で協力が可能な学生委員に実施した。学生交流会参加者に関しては、当日のイベントオリエンテーションにてアンケート調査について口頭にて説明し、またアンケート用紙に研究協力のお願、趣旨、方法、倫理的配慮を記載し、アンケートの提出をもって同意とした。なお、本研究は福岡県立大学研究倫理委員会の承認（平成26年度－#38）を得て実施した。

### 結 果

#### 1. 対象

フォーカスグループインタビュー参加協力者は6名、学生委員アンケートの回答者は33名、参加者アンケートの回答者は59名であった。

#### 2. 参加者アンケート結果

表1の通り「将来についてもっと考えるべきであった」が最も高く4.69±0.59点、「さまざまな考え方があることを実感することができた」が4.57±0.66点、「積極的に活動することが必要だと思った」が4.56±0.59点、「かんたま祭に参加して良かった」は4.57±0.63点、「企画委員として参加してみたいと思った」は3.83±0.94点であった。最も平均点の低かった「企画委員として参加してみたいと思った」と他の項目についてt検定を行ったところ「将来についてもっと考えるべきであった」(t=6.05, p<0.001), 「かんたま祭に参加してよかった」(t=4.99, p<0.001), 「さまざまな考え方があることを実感することができた」(t=4.91, p<0.001), 「積極的に活動することが必要だと思った」(t=4.84, p<0.001), 「もっとこのような機会があればいいと思う」(t=3.82, p<0.001), において有意な差がみられた。

#### 3. 学生委員アンケート・インタビュー結果

学生委員アンケートにおける自由記述並びにフォーカスグループインタビューの語りを分析した結果、参加動機に関しては表2の通り23のコードから9つのサブカテゴリと4つのカテゴリが抽出された。また、かんたま祭の企画運営を通して得られた力、自己の課題、学生コンソーシアムの課題としては、表3の通り23のサブカテゴリと13のカテゴリ、3つのコアカテゴリが抽出された。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを[ ]で表記する。なおコアカテゴリは《 》で表記する。

##### 1) 参加動機

参加動機のカテゴリは、【繋がりの継承】【意志

表1 学生交流会への一般参加を対象としたアンケート結果

質問番号	質問項目	平均点	標準偏差
1	かんたま祭に参加して良かった。	4.57	0.63
2	大学を超えた(違う大学の学生との)交流が必要だと思った。	4.17	0.83
3	積極的に活動することが必要だと思った。	4.56	0.66
4	チームで動く重要性が体験できた。	4.41	0.77
5	将来についてもっと考えるべきであった。	4.69	0.54
6	さまざまな考え方があることを実感することができた。	4.57	0.66
7	感動を得ることができた。	4.00	0.93
8	もっとこのような機会があればいいと思う。	4.44	0.77
9	企画委員として参加してみたいと思った。	3.83	0.94
10	次回も参加したいと思う。	4.06	0.88

(N=59)

表2 学生委員の参加動機

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
繋がり継承	友人の誘い	友人の誘い
	先輩からの紹介	先輩からの紹介
	教員からの勧めや誘い	先生からの紹介
		教員の誘い
	先生の勧め	
委員会としての参加	委員会としての参加	
	前年度より役員	
意志の伝承	意志の伝承	先輩の意志の引き継ぎ
		引き継ぎ
興味と挑戦	内容運営への興味	内容に興味
		ガイダンスに興味
		どんな行事か興味
		興味
	自分たちでの運営に興味	
	企画への挑戦	楽しいことをしてみたい
		情報を得られる機会
企画		
企画や計画を行いたい		
繋がり解発	掲示物を見て	募集を見つけて
		学内の掲示
	他大学学生との交流	他大学との協力
		他大学との交流
		他大学の学生との交流

表3 学生委員の企画運営を通して得られた力、自己の課題、学生コンソーシアムの課題

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード	
関心と関係	気配り	気遣い	周囲への気配り	
		予測した行動	予測して行動	
	協働 情報の共有	助け合い	助け合うことの大切さを知った	
		連絡手段	連絡手段	
		報告の大切さ	報告の大切さ	
		相談	教員への相談	
	関係性	交流の積み重ね	会議を重ねての雰囲気改善	
		つながりの実感	会議を重ねてのつながりの実感	
	行動と遂行	積極性	発言力	積極的な発言
			行動力	積極的行動
状況把握力			状況を把握しての行動	
計画性		企画力	早めの計画	
		役割分担	事前の役割分担	
		詳細性	詳細な計画	
責任		責任性	与えられた仕事への責任	
意志		成功への意志	作り上げようとする意志が必要	
リーダーシップ		リーダーシップの重要性	リーダーシップがとれるようになった	
思考力		考える力	考えて行動	
作業効率	作業効率	作業効率を考えながらの行動		
克服と挑戦	もどかしさの克服	学年の壁	先輩への言いにくさ	
		大学の壁	大学ごとの運営	
		関係性の未成熟	企画委員同士の交流不足	
	次期への挑戦	次回への意志	来年はもっといいものにしたい	

の伝承】【興味と挑戦】【繋がり解発】であった。  
 【繋がり継承】は、[友人の誘い][先輩からの紹介][教員からの勧めや誘い][委員会としての参加]により構成されていた。  
 【意志の伝承】は[意志の伝承]により構成されていた。

【興味と挑戦】は[内容運営への興味][企画への挑戦]により構成されていた。  
 【繋がり解発】は、

[掲示物を見て][他大学学生との交流]により構成されていた。

2) 企画運営を通して得られた力・自己の課題・学生コンソーシアムの課題

企画運営を通して得られた力・自己の課題・学生コンソーシアムの課題のコアカテゴリは《関心と関係》《行動と遂行》《克服と挑戦》であった。

《関心と関係》は【気配り】【協働】【情報の共有】【関係性】により構成されていた。なお、【気配り】は[気遣い][予測]、【協働】は[助け合い]、【情報の共有】は[連絡手段][報告の大切さ][相談]、【関係性】は[交流の積み重ね][つながりの実感]により構成されていた。

《行動と遂行》は【積極性】【計画性】【責任性】【意志】【リーダーシップ】【思考力】【作業効率】により構成されていた。なお、【積極性】は[発言力][行動力][状況把握力]、【計画性】は[企画力][役割分担][詳細性]、【責任性】は[責任性]、【意志】は[成功への意志]、【リーダーシップ】は[リーダーシップの重要性]、【思考力】は[考える力]、【作業効率】は[作業効率]により構成されていた。

《克服と挑戦》は【もどかしさの克服】【次期への挑戦】により構成されていた。なお、【もどかしさの克服】は[学年の壁][大学の壁][関係性の未成熟]、【次期への挑戦】は[次回への意志]により構成されていた。

## 考 察

### 1. 一般参加者の学生交流会の効果

参加への満足度や多様性、積極性、将来性への思いは高いものの企画委員としての参加希望は低かった。これは、学生コンソーシアムの課題にあるように学生委員の活動の様子が負担感や他の活動との調整などネガティブに感じていたことが考えられる。しかし、将来のことや積極的な活動の必要性など、能動的に活動したいという意志を見受けることができ、同時に多様な価値を考える機会になっていたと考える。参加学生は両価性の感情をもちながらも参加することによって充実した時間を過ごしていたのではないかと考える。また、本アンケート結果は客観的に学生委員を評価していたとも考えられ、学生委員の運営の実態が反映されていたものと考えられる。これは、後述の学生委員の自己課題が解決されることで参加者の評価も上がることが期待されるものと考えられる。

### 2. 学生委員の参加動機

他者からの勧めや誘いなど【繋がり継承】が参加の動機となっていた。また【意志の伝承】のように先輩の意志を引き継ぎたいというケアリング・マインドに溢れる表現が見受けられた。そして[内

容運営の興味]に限らず、[企画への挑戦]といった、イベント企画を創造しようとする姿勢がうかがえた。さらに[掲示物を見て]や[他大学学生との交流]といった【繋がり継承】として参加していることが分かった。これらの姿勢が後輩たちに受け継がれていくことで学びの文化が醸成されていくものとする。

### 3. 学生委員が企画運営を通して得た力

企画段階からの数回の会議を通して[交流の積み重ね]となり[繋がり実感]を得ていた。当日は学生委員が【協働】し【気配り】を行いながら【思考力】を発揮し学生交流会を運営していた。なかでも【情報の共有】を図り【責任】をもって取り組んでいた。このように他者への関心と他者との関係、すなわち《関心と関係》を核としながら企画運営を進めていたことが考えられる。これは学士力(中教審, 2008)におけるチームワークやリーダーシップ、社会人基礎力(経産省, 2006)のチームで働く力、前に踏み出す力に共通するものだと考えられる。このように、企画運営に携わることで大学生にとって必要な力を得る機会になることが示唆される。そして、学びの文化、つまり学びとは何かを考える機会となりその場や空間を経験することが出来ていたと考える。また、学生委員はその多くが看護単科大学に所属しながらも、それぞれの大学の特色をもち合わせながら他大学の学生との交流を通して看護における基本的態度や能力を身につける機会や学習の環境を創造していたものとする。

### 4. 学生委員が企画運営を通して自覚した課題

課題として[発言力][行動力][状況把握力]の【積極性】や【計画性】の不足を自覚し《行動と遂行》を課題としていた。これらは学生の月に1回の対面会議やインターネット会議でのやり取りで関係づくりが不十分な中で関係性の構築も不十分であったためによる弊害が示唆される。また、【作業効率】を考えながらの行動や【もどかしさの克服】を目指していく中で、来年はもっといいものにしたいという[次回への意志]【次期への挑戦】へとつながっていた。この前向きな発言と同時に学生からは学生委員の交流会開催の提案などの声が聞かれており発言のしやすい関係づくりを目指していることが考えられ今後の発展が期待できる。

### 5. 全体考察

学生コンソーシアムの活動を通して得られた力は

大学生として必要とされる学士力（中教審，2008）や社会人基礎力（経産省，2006）と共通するところが多い。また，看護職者として必要な力である卒業時到達目標における能力（厚生労働省，2011）における「I ヒューマンケアの基本的な実践能力」や「IV ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力」の礎とも言える。このように学生の記述や語りが表現されたことは学生コンソーシアムに学生委員として参加することで看護大学生として総合的にあらゆる力を得ることができると示唆されたといえる。また，課題の自覚は，意欲と強い意志の現われであり体得が可能となることで，より一層の強みを獲得することにつながる。

平成21年度以降，培われてきている学びの文化やケアリング・マインドを仲間と共有することは未来への一歩を踏み出す力となり，また同時に後輩へ受け継いでいくべく機会となっているのではないかと考える。さらには，大学は違えども就職先や研修での再会の可能性もあり，このような輪が広がっていくことこそがケアリング・マインドに満ちたケアリング・アイランド九州沖縄を実現すると言えないのではないだろうか。

本研究は，学生委員の単年度の横断的な研究であるため学びの文化の醸成については十分な知見が得られているとは言い難い。今後，学生時代の経験が将来どのように活かされたのかという縦断的な追跡調査も必要なのではないかと考える。文化という観点からは，他の研究方法も検討が必要かもしれない。

なお，本稿は平成26年度福岡県立大学研究奨励交付金（個別研究）の助成を受け実施した（増満，印刷中）。また一部を第2回国際ケアリング学会にて発表した（Masumitsu，2015）。

#### 謝 辞

本研究にご協力をいただきました対象者の皆様に深く感謝申し上げます。

#### 文 献

- 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会. (2008). 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ），16.
- 福岡県立大学ケアリング・アイランド九州沖縄構想戦略連携室. (2012). 看護系大学から発信するケアリング・アイランド九州沖縄構想プロジェクト報告，180-193.
- 経済産業省. (2006). 社会人基礎力. 2015/12/15参照. [http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku\\_image.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf)
- 厚生労働省. (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 4.
- 京都学生祭典. (2015). 京都学生祭典案内. 2015/10/1参照. <http://www.kyoto-gakuseisaiten.com/>
- Makoto Masumitsu. (2015). Strengths Obtained by Nursing College Students Through the Planning and Staging of Intercollegiate Exchange, The 2nd International Conference on Caring and Peace in Tokyo.
- 増満誠. (印刷中). 看護大学生の所属大学を超えた交流の効果の検討，福岡県立大学研究奨励交付金（個別研究）報告書.
- 大学コンソーシアム八王子. (2015). 大学コンソーシアム八王子学生発表会. 2015/10/1参照. <http://www.gakuen-hachioji.jp/project/presentation/>
- 大学コンソーシアム京都. (2015). 大学コンソーシアム京都トップページ. 2015/10/1参照. <http://www.consortium.or.jp/>

受付 2015. 10. 13

採用 2016. 1. 25